「負けない構え」
～ゴリラ社会から学ぶことは多い～
京都大学総長 山極寿一

●山極寿一（やまぎわ じゅいち）
1952年生まれ。75年京都大学理学部卒業、80年同理学研究科博士課程単位取得退学。理学博士。2002年から同理学研究科教授、11～13年同理学研究科長。専門は人類学、霊長類学。「暴力はどこからきたか」「サル化する人間社会」など著書多数。

2014年10月に第26代総長に就任した山極寿一教授。ゴリラ研究の第一人者です。総長就任前の山極教授を京都大学理学研究科に訪ねました。
（2014年8月8日取材）

ゴリラ研究の道に進むきっかけ

「ゴリラと人間は祖先が一緒、祖先の特徴が人間にどうつながってきたか、その由来を知りたい」「ゴリラ、オランウータン、チンパンジーはヒト科（Hominidae）に属し、遺伝的、生物学的に見ればゴリラはサルの仲間より人間に近い。つまり人間の仲間、逆に言うと人間はゴリラの仲間ということになる」「ゴリラはヒト科の一員として分岐してきた。実際ゴリラは人間のように声を出して笑います。でも、どのように分かれたかは化石やDNAからではわからない。生態を研究して初めてわかってきます」

ゴリラと共に行動

「一年のうち数カ月はアフリカの現地で彼らと暮らします。生態を観察するため、ジャングルの中で彼らと行動を共にします。朝から晩までゴリラと一緒に森を歩き、夜は山小屋かキャンプ地で寝ます」「馴れればゴリラは人間の存在を意識はしなくなる。いわば人間がペットになったような感覚です。接近しても決して襲ってくるようなことはありません」

face to face

「最初は怖かった。相手は大きいから接近するのは相当な覚悟がいる。攻撃しかけてくることも。時間をかけて段々距離を縮めていく。彼らに受け入れてもらうのに5、6年はかかりました」「まず毎日挨拶をする。『グフーム』とか言って、挨拶つまり顔と顔を合わせることが重要。お互いを信用するためには必要な行為です。言葉以外のもので通じ合うということです」「昔仲良く付き合ったマウンテンゴリラのタイタス（オス）は26年ぶりに会いに行ったら向こうも思い出してくれた。言葉ではなくface to faceが重要です」

勝ち負けのない社会

「彼らには勝ち負けがない、勝者を作らない社会。サルのように相手を押しのける、支配する、独占するということはしない。弱いという態度を示さないことが重要で、この『負けない構え』がコンフリクトや喧嘩の根元を断つ」「加えて共感や仲間を助けようとする気持ち、相手の気持ちを推察する能力を持っている。この点がサルとは違う。ところが、今の人間社会はサル化していると感じます」

「負けない構え」

「ゴリラのかっこいいところは、オスは決して振り返らない、振り返らないでもわかっているよというのが、メスや子どもにとっては信頼感のある存在として映る」「私がよく言う『泰然自若』としているのがゴリラ。人間も男らしさを追求するとゴリラに似てくる。人間の男もゴリラのオスも求められる姿勢は同じ」「歌舞伎の見得にも似た『負けない構え』が人間にもほしい。これは座右の銘にしようと思っています」

学問の伝統

「京大の教育の基本は自学自習です。好きなことを見つけて自分で考えていく。大事なことはそれをみんなで話し合う、自分の言葉で人に語る。面白いと思わせなければいけない」「私のゼミでは一人で何時間話してもいい。エンドレスです。言いたいことを言ってそれをもとにみんなでしゃべる。私も学生時代一人で9時間しゃべったことがあります」「教員を目標にするのではなく超えてほしい。上下関係を超えて学問のライバルであるというのが京大の豊かな創造力の源泉です。学生も教員も新しい発見に挑んでいることでは同じ。一緒に話をし、アイデアを出し考えていく。教師も学生もそうあってほしい」「だから理学部では先生とは呼ばせない、みんな“さん”付け、伝統です。これで京大の学問が成熟してきました」

自由の学風

「京大の『自由の学風』は昔と変わっていない。ただ今は学習のツールが全く違う。昔は知識を得るためには本か教員に求めた。今はインターネットで知識を得る。講義に出る必要が少なくなった。代わりに、インターネットで世界の認識の仕方、知識を実践に結びつける方法を学生は学ぼうとする」「教師は学生に自分が何を考えているか、講義、実験、フィールドワークのなかで、対話、討論を通じて考えることを学生に伝えていくことが大切でしょう」「討論はしても徹底的にやっつけない、お互い高めながら議論を乗り越える。それが学問の垣根を越えて京大の多様な思考力を高めています」

なぜ京大に

「もともと東京の生まれです。湯川秀樹先生のいる京大で学びたいと思ってやってきた。小さい時からおしゃべりで、山が好きでした。自然は好きだったが、昆虫採集はしない、動物を殺すのが苦手だからです」「京都に来て四十数年たちますが、いまだに京都弁ではないと言われます。私が育った研究室も、昔は今西錦司さんとか生粋の京都や関西出身の人が多かった。今は京都以外の人も多いですが」

阪大をどう見ているか

「阪大の中道正之先生（人間科学研究科）とはグループでサルの行動も一緒に研究しています。阪大にはいくつかの分野ですごい先生がいて世界の最先端を行く研究をしている。そういった分野（たとえば生命科学、工学など）で手を取り合い、お互いの長所を出しながら、関西大学連合みたいなものを作って一緒にやりたい。良い連携が組めるといいと思います」

－インタビューを終えて－

人を引き込ませる会話と包み込むような親近感を感じました。ゴリラと仲が良いのも頷けました。普段アフリカで体力使っているから、こっち（日本）では人と話をするか酒を飲むか学生を指導するかして過ごすそうです。（総長就任で）研究が遠ざかるのは残念ですが、とおっしゃいます。「自由の学風」を地で行く山極先生、京大も大きく変わる予感がします。
（インタビュー：広報・社学連携オフィス・松本紀文、写真撮影：クリエイティブユニット准教授・伊藤雄一）